

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	ガッコウホウジン アカツキガクエン 学校法人 暁学園								
フリガナ大学の名称	ヨッカイチカンゴイリョウダイガク 四日市看護医療大学大学院 〔The Graduate School of Nursing and Medical Care, Yokkaichi Nursing and Medical Care University〕								
大学本部の位置	三重県四日市市萱生町1200番地								
大学の目的	教育基本法及び学校教育法の精神に基づき、看護医療分野に関する学術の理論及び応用を教授研究し、深い学識及び卓越した能力を培い、看護学及び医療科学の発展と地域社会における人々の健康と福祉の向上に寄与することを目的とする。								
新設学部等の目的	生命の尊厳と深い人間理解に基づいた臨床検査実践能力を培い、臨床検査学分野でリーダーシップを担う高度専門職業人並びに高度な専門知識を備えた教育・研究者を養成することを目的とする。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】看護医療学部 臨床検査学科 昼夜開講制（昼間主、夜間主の区別なし） 14条特例の実施
	看護医療学研究科	年	人	年次人	人		年月第年次	三重県四日市市萱生町1200番地	
	臨床検査学専攻	2	5	—	10	修士（臨床検査学）	令和6年4月第1年次		
計		5	—	10					
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	看護学研究科 看護学専攻〔定員減〕（△5）（令和6年4月） 令和6年4月 名称変更予定 看護学研究科→看護医療学研究科								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	看護医療学研究科 臨床検査学専攻	23 科目	19 科目	0 科目	42 科目	30 単位			
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等
		教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設分	看護医療学研究科 臨床検査学専攻（修士課程）	7 (7)	3 (3)	4 (4)	— (—)	14 (14)	— (—)	7 (7)
		計	7 (7)	3 (3)	4 (4)	— (—)	14 (14)	— (—)	7 (7)
	既設分	看護学研究科 看護学専攻（修士課程）	8 (8)	7 (7)	— (—)	— (—)	15 (15)	— (—)	13 (13)
	計	8 (8)	7 (7)	— (—)	— (—)	15 (15)	— (—)	13 (13)	
	合計	15 (15)	10 (10)	4 (4)	— (—)	29 (29)	— (—)	20 (20)	
教員以外の職員の概要	職 種			専 任		兼 任		計	
	事務職員	18 (18)		8 (8)		26 (26)			
	技術職員	1 (1)		— (—)		1 (1)			
	図書館専門職員	1 (1)		3 (3)		4 (4)			
	その他の職員	1 (1)		— (—)		1 (1)			
	計	21 (21)		11 (11)		32 (32)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	運動場用地のうち 24,000㎡は四日市 大学と共用、 借用面積25,094㎡			
	校 舎 敷 地	15,468㎡	0㎡	35,503㎡	50,917㎡				
	運 動 場 用 地	0㎡	24,000㎡	13,827㎡	37,827㎡				
	小 計	15,468㎡	24,000㎡	49,330㎡	88,798㎡				
	そ の 他	0㎡	0㎡	47,180㎡	47,180㎡				
合 計	15,468㎡	24,000㎡	96,510㎡	135,978㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	食堂、体育館、ク ラブハウスは四日 市大学と共用			
		11,236㎡ (11,236㎡)	4,393㎡ (4,939㎡)	16,214㎡ (16,214㎡)	31,843㎡ (31,843㎡)				
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体で共用			
	8室	5室	9室	2室 (補助職員1人)	1室 (補助職員1人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数	内1室は学長室兼 用				
		看護医療学研究科臨床検査学専攻		14	室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 点	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用 分 図書25,438冊 〔2,297冊〕 学術雑誌107種 〔22種〕 図書には電子ブッ クを含む	
	看護医療学研究科 臨床検査学専攻	1,515〔151〕 (1,409〔151〕)	15〔4〕 (15〔4〕)	3〔2〕 (3〔2〕)	753 (753)	1,638 (1,628)	58 (58)		
	計	1,515〔151〕 (1,409〔151〕)	15〔4〕 (15〔4〕)	3〔2〕 (3〔2〕)	753 (753)	1,638 (1,628)	58 (58)		
図 書 館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数	大学全体（体育館 は四日市大学と 共用）				
		719㎡	118	100,000冊					
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						
		2,576㎡	該当なし						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科単位での算 出不能なため、学 部との合計 教授480千円 准教授450千円 講師400千円
	教員1人当り研究費等		451千円	451千円	－千円	－千円	－千円	－千円	
	共同研究費等		2,000千円	2,000千円	－千円	－千円	－千円	－千円	
	図書購入費	1,045千円	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円	－千円	
	設備購入費	0千円	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円	－千円	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	1,100千円	900千円	－千円	－千円	－千円	－千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		手数料収入、資産運用収入、雑収入等							
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	四日市看護医療大学							
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
		年	人	年次 人	人		倍		
	看護医療学部 看護学科 臨床検査学科	4 4	100 50	－ －	400 200	学士(看護学) 学士 (臨床検査学)	1.15 0.82	平成19年 令和2年	三重県四日市市萱生 町1200番地
	看護学研究科 看護学専攻	2	10	－	20	修士(看護学)	0.25	平成23年	
	大 学 の 名 称	四日市大学							
学 部 等 の 名 称	就業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地	
	年	人	年次 人	人		倍			
環境情報学部 環境情報学科	4	70	－	280	学士 (環境情報)	0.86	平成9年	三重県四日市市萱生 町1200番地	
総合政策学部 総合政策学科	4	130	－	520	学士 (総合政策)	0.98	平成13年		
附属施設の概要	該当なし								

学校法人暁学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
四日市看護医療大学				四日市看護医療大学				
看護医療学部				看護医療学部				
看護学科	100	—	400	看護学科	100	—	400	
臨床検査学科	50	—	200	臨床検査学科	50	—	200	
計	150	—	600	計	150	—	600	
看護学研究科				看護医療学研究科				名称変更
看護学専攻	10	—	20	看護学専攻	5	—	10	専攻の設置(認可申請)
計	10	—	20	臨床検査学専攻	5	—	10	
				計	10	—	20	
四日市大学				四日市大学				
環境情報学部				環境情報学部				
環境情報学科	70	—	280	環境情報学科	70	—	280	
総合政策学部				総合政策学部				
総合政策学科	130	—	520	総合政策学科	130	—	520	
計	200	—	800	計	200	—	800	

教育課程等の概要																	
(看護医療学研究科臨床検査学専攻)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通科目	生命・医療倫理学	1前	2			○								兼2	私バス・共同(一部)・ｽﾃｲ		
	チーム医療論	1前	2			○			1	1					私バス・ｽﾃｲ		
	在宅医療論	1前	2			○									私バス・ｽﾃｲ		
	検査研究演習	1前	2				○		7	2	4				私バス		
	医療情報管理学	1後		2		○				1	1				私バス・ｽﾃｲ		
	保健医療福祉論	1後		2		○				1					私バス・ｽﾃｲ		
	先端医療論	1後		2		○			1	1					私バス・ｽﾃｲ		
	食理学	1後		2		○			1	1					私バス・ｽﾃｲ		
	医療英語	1前		2		○									私バス・ｽﾃｲ		
小計(9科目)	—		8	10	0				7	2	4	0	0	兼7			
専門科目	病因解析学分野	産業衛生学特論	1前		2		○			1							
		産業衛生学演習	1後		2			○		1							
		病原因子検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1							
		病原因子検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1							
		病原因子検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1							
		病原因子検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1							
		生体防御検査学特論	1前		2		○			1							
		生体防御検査学演習	1後		2			○		1							
		生物化学検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1	1					私バス	
		生物化学検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1	1					私バス	
		生物化学検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1	1					私バス	
		生物化学検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1	1					私バス	
		遺伝子検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1		1				私バス	
		遺伝子検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1		1				私バス	
		遺伝子検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1		1				私バス	
		遺伝子検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1		1				私バス	
小計(16科目)	—		0	32	0				5	1	1	0	0	兼0			
専門科目	病態機能検査学分野	生体機能検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1		1				私バス	
		生体機能検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1		1				私バス	
		生体機能検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1		1				私バス	
		生体機能検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1		1				私バス	
		病態解析検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1	1					私バス	
		病態解析検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1	1					私バス	
		病態解析検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1	1					私バス	
		病態解析検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1	1					私バス	
		病理病態検査学特論Ⅰ	1前		2		○				1	1				私バス	
		病理病態検査学特論Ⅱ	1後		2		○				1	1				私バス	
		病理病態検査学演習Ⅰ	1前		2			○			1	1				私バス	
		病理病態検査学演習Ⅱ	1後		2			○			1	1				私バス	
		在宅医療研究特論	1前		2		○					1				兼3	私バス
		在宅医療研究演習	1後		2			○				1				兼3	私バス
小計(14科目)	—		0	28	0				2	2	3	0	0	兼1			
特別研究	特別研究Ⅰ	1後	2				○		7	3	3						
	特別研究Ⅱ	2前	3				○		7	3	2						
	特別研究Ⅲ	2後	3				○		7	3	2						
	小計(3科目)	—	8						7	3	3	0	0	兼0			
合計(42科目)		—	16	70	0				7	3	4	0	0	兼7			
学位又は称号	修士(臨床検査学)	学位又は学科の分野			保健衛生学関係 (看護学関係及びリハビリテーション関係以外)												
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
2年以上在学し、共通科目から必修科目8単位を含め14単位以上、専門科目から8単位以上(同一名称が付く特論科目と演習科目を選択)、特別研究8単位、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受け、修士論文の審査及び最終試験に合格すること。(履修科目の登録の上限:44単位(年間))						1学年の学期区分				2学期							
						1学期の授業期間				15週							
						1時限の授業時間				90分							

教 育 課 程 等 の 概 要

(看護医療学研究科臨床検査学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通科目	生命・医療倫理学	1前	2			○									兼2	他バス・共同(一部)・特'イ	
	チーム医療論	1前	2			○			1	1					兼1	他バス・特'イ	
	在宅医療論	1前	2			○			1						兼1	他バス・特'イ	
	検査研究演習	1前	2				○		7	3	4					他バス	
	医療情報管理学	1後		2		○				1	1					他バス・特'イ	
	保健医療福祉論	1後		2		○				1						兼1	他バス・特'イ
	先端医療論	1後		2		○			1	1						他バス・特'イ	
	食理学	1後		2		○			1	1						他バス・特'イ	
	医療英語	1前		2		○										兼1	特'イ
小計(9科目)	—		8	10	0				7	3	4	0	0		兼4		
専門科目	病因解析学分野	産業衛生学特論	1前		2		○			1							
		産業衛生学演習	1後		2			○		1							
		病原因子検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1							
		病原因子検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1							
		病原因子検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1							
		病原因子検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1							
		生体防御検査学特論	1前		2		○			1							
		生体防御検査学演習	1後		2			○		1							
		生物化学検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1	1						他バス
		生物化学検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1	1						他バス
		生物化学検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1	1						他バス
		生物化学検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1	1						他バス
		遺伝子検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1		1					他バス
		遺伝子検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1		1					他バス
		遺伝子検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1		1					他バス
		遺伝子検査学演習Ⅱ	1後		2			○		1		1					他バス
	小計(16科目)	—		0	32	0				5	1	1	0	0		兼0	
	病態機能検査学分野	生体機能検査学特論Ⅰ	1前		2		○			1		1					他バス
		生体機能検査学特論Ⅱ	1後		2		○			1		1					他バス
		生体機能検査学演習Ⅰ	1前		2			○		1		1					他バス
生体機能検査学演習Ⅱ		1後		2			○		1		1					他バス	
病態解析検査学特論Ⅰ		1前		2		○			1	1						他バス	
病態解析検査学特論Ⅱ		1後		2		○			1	1						他バス	
病態解析検査学演習Ⅰ		1前		2			○		1	1						他バス	
病態解析検査学演習Ⅱ		1後		2			○		1	1						他バス	
病理病態検査学特論Ⅰ		1前		2		○				1	1					他バス	
病理病態検査学特論Ⅱ		1後		2		○				1	1					他バス	
病理病態検査学演習Ⅰ		1前		2			○			1	1	1				他バス	
病理病態検査学演習Ⅱ		1後		2			○			1	1	1				他バス	
在宅医療研究特論		1前		2		○			1		1					他バス	
在宅医療研究演習		1後		2			○		1		1					他バス	
小計(14科目)	—		0	28	0				3	2	3	0	0		兼0		
特別研究	特別研究Ⅰ	1後		2			○		7	3	4						
	特別研究Ⅱ	2前		3			○		7	3	4						
	特別研究Ⅲ	2後		3			○		7	3	4						
	小計(3科目)	—		8					7	3	4	0	0		兼0		
合計(42科目)		—		16	70	0			7	3	4	0	0		兼4		
学位又は称号	修士(臨床検査学)		学位又は学科の分野			保健衛生学関係 (看護学関係及びリハビリテーション関係以外)											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
2年以上在学し、共通科目から必修科目8単位を含め14単位以上、専門科目から8単位以上(同一名称が付く特論科目と演習科目を選択)、特別研究8単位、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受け、修士論文の審査及び最終試験に合格すること。(履修科目の登録の上限:44単位(年間))						1学年の学期区分			2学期								
						1学期の授業期間			15週								
						1時限の授業時間			90分								

授 業 科 目 の 概 要			
(看護医療学研究科臨床検査学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	生命・医療倫理学	<p>生命倫理学は、医学上の生命のみならず、人権や生命の質といった生命の全てを包含する研究分野である。本科目では、生命・医療倫理が抱える歴史的な問題や基本的概念を認識し、医療者が直面する倫理的問題の概要と倫理的意思決定のためのアプローチの方法論について学修する。また、臨床の研究活動における研究倫理（倫理的配慮）の必要性と研究者の基本的責務についても学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式／15回）</p> <p>（17 三好陽子 /7回） 生命・医療倫理の基盤となる理論・諸概念およびその歴史の変遷と、現代医療における倫理問題についてトンプソンのモデルなどを活用して学習を進める。</p> <p>（17 三好陽子・16 日比千恵 /8回）（共同） 医療場面における倫理的意思決定のアプローチ、倫理コンサルテーション、及び臨床研究での倫理的配慮・研究対象者の権利・安全の確保などについて広く紹介し、倫理のガイドラインについて理解する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
	チーム医療論	<p>現在の医療でチーム医療は必須である。救急医療や緊急時の対応など臨床の場では臨床検査技師と看護師はそれぞれの専門を生かしチーム医療の一員を構成している。学部での科目において、チーム医療の現状を把握し、それぞれの職種間の関わりは学修している。しかし現状、大規模病院においては両者の関りは極めて小さい。本講では、医療への向き合い方の著しく異なる職種がどのようにチームを構成でき、効果的な職場関係を構築できるか（Team building）について、プログラムの作成など、両職種共同により具体的手法を検討しながら進める発展的なチーム医療を学修する。</p> <p>（オムニバス方式／15回）</p> <p>（5 森啓至 /8回） チーム医療における臨床検査技師の役割と看護師の役割。両者の協働の推進のために必要な条件。</p> <p>（8 山口央輝 /7回） 効果的な職場関係を構築するための、チーム医療プログラムの作成手法。</p>	オムニバス方式

<p style="text-align: center;">共通科目</p>	<p style="text-align: center;">在宅医療論</p>	<p>我が国は超高齢化社会を迎え、これからの医療には在宅医療は必須となる。また、新規感染症の発生や流行に伴う病院受診を控える人々の増加など、通院や検診頻度の低下による傷病治療の遅れも懸念されている。これらの状況から、在宅医療の必要性はより高まることが示唆されている。従来、臨床検査技師は在宅医療への参加意義に乏しかったが、将来、重要な担い手の一員となることが期待される。本講では、どのような臨床検査機器が在宅医療に必要であるか検討するための学修をする。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(7) 福田愛子 /3回 ライフステージに応じた健康支援の現状、特に在宅医療における他職種連携の現状と問題点を中心に地域医療体制をより発展させるための構築についてなど幅広く解説する。</p> <p>(6) 森本誠 /4回 在宅医療における臨床検査技師の役割を中心に検体採取技術、検体検査分野の在宅医療への応用について解説する。</p> <p>(5) 藤田孝 /3回 在宅医療で用いられる臨床検査の概要、精度管理を含めたPOCT装置の現状と問題点や今後の展望を広く解説する。</p> <p>(18) 多次淳一郎 /5回 在宅医療における問題点と、多職種連携の展望及びその共通言語としての検査データの価値を理解する。</p>	<p style="text-align: center;">オムニバス方式</p>
<p style="text-align: center;">共通科目</p>	<p style="text-align: center;">検査研究演習</p>	<p>医療は検査結果なしに治療を進めることは困難を極める。生理学的検査、内視鏡検査、放射線やMRIを含む画像検査、カテーテルを用いた検査、生化学的検査、ウイルス・細菌学的検査、免疫学的検査、病理学的検査、動作や作業などの行動機能検査、高次脳機能検査など多職種による多種多様な検査がある。救急治療、周術期、慢性期など病態に応じた検査のほか、健診として行われる検査も多様である。本演習では、専門家によるオムニバス形式にて様々な検査技術や結果の判定法を修得する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(2) 高崎昭彦/2回 生化学的検査の領域から、新規臨床検査法、POCT機器開発まで幅広く解説する。</p> <p>(1) 柴田英治/2回 公衆衛生学、産業衛生学における臨床検査の意義と特殊な検査法について解説する。</p> <p>(5) 森啓至/2回 疾病時のサイトカインやホルモンを含む生理学検査の意義、結果の考察法などについて講義する。</p> <p>(1) 千原猛/2回 がんの病態および検査法について、最新の技術の解説と栄養管理法を講義する。</p> <p>(7) 星野真理/2回 免疫学の観点から臨床検査を解説する。</p> <p>(3) 井上 孝/2回 微生物学検査の最近の動向と新規検査法を紹介する。</p> <p>(4) 伊藤康宏/2回 生理学的検査のうちカテーテル検査、内視鏡検査、画像検査(熱画像、超音波、放射線およびMRIによる検査を含む)、在宅用のCPAPについても解説する。</p> <p>(2) 山口央輝/2回 先端医療における遺伝子検査の役割と方法について概要を紹介する。</p>	<p style="text-align: center;">オムニバス方式</p>

- (3) 小菅優子/2回
食理学、健康食品の観点から臨床検査を俯瞰する。従来の知見から現在の考え方まで幅広く解説する。食理学、健康食品の成分が臨床検査に及ぼす影響について解説する。
- (6) 森本誠/1回
輸血医療における問題点と輸血検査の課題について解説する。
- (4) 榎本喜彦/1回
電気生理学的手法による中枢神経系および末梢神経系の最新の検査法と適応について解説する。
- (11) 澤田浩秀/2回
病理組織学の観点から、最新の形態学的解析手法の詳細および理論について講義する。
- (14) 鈴木真紀子/1回
血液学の最新の情報について解説する。末梢血だけでなく、骨髄腫、リンパ腫、白血病についても紹介する。
- (12) 大島茂/1回
現在の日本における寄生虫症の原因となる各種寄生虫のゲノムDNAによる同定法や新規診断法について解説する。

<p>医療情報管理学</p>	<p>医療情報管理学では、医療現場において得られる各種データの管理のための収集や分析に必要な方法論、および統計学的手法について学修することを目的とする。本科目では、実際の医療情報における各種管理法だけでなく、修論研究で必要となる実験結果の統計処理や解釈、アンケート調査の解析手法についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式／15回)</p> <p>(③ 小菅優子／8回) 医療現場での各種データ管理法、データの収集法および分析法について講義する。</p> <p>(④ 榎本喜彦／7回) 結果を得るための計画の立案、アンケート調査法、各種質問紙の選択法および解析手法について解説する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>保健医療福祉論</p>	<p>わが国では高齢化の進展とそれに伴う慢性疾患の増加、加えて今後世界的な新規感染症が予測されるなど徐々に疾病構造が変化してきている。一方、保健医療を受ける国民の生活構造、家族形態・機能の変化、医療福祉サービスの提供システムの改革などを背景として療養・ケアの場も多様化している。本講では保健医療福祉を取り巻く話題や研究動向を紹介するとともに、履修者が自ら調べた題材をもとに、今後の保健医療福祉を展望し、その中で臨床検査技師が担い得る機能・役割等について考察を深める。</p> <p>(オムニバス方式／15回)</p> <p>(18 多次淳一郎／1回) 保健医療福祉に関する最近の話題を提示し、それを参考に履修者が自らテーマを選定し、プレゼンテーションを行う。それをもとに履修者同士での討議を通じて考察を深める。</p> <p>(② 山口央輝／5回) 疾患構造の変化、新規感染症の推移と保健医療制度のあり方について、研究レベルでの紹介</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>先端医療論</p>	<p>先端医療である抗がん剤、高度急性期医療において、専門的・先進的な医療、ゲノム医療、神経疾患治療薬などの開発には非常に多くの基礎知識が必要である。本講では実際に使用されている抗がん剤やゲノム医療だけでなく、創薬や新しい医療機器、厚生労働省に定められた先進医療についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式／15回)</p> <p>(2 高崎昭彦／8回) 高度急性期医療の現状や将来について、多くの論文などの報告を交えて紹介する。</p> <p>(② 山口央輝／7回) ゲノム医療の詳細や、神経疾患治療薬などの開発の現状を紹介する。</p>	<p>オムニバス方式</p>

共通科目	食理学	<p>食理学とは、食品を生化学、生理学などにより解析し、生体への効果や体内動態に基づいて食品を薬品のように扱う学問である。健康食品やハーブなども含め、健康状態のみならず疾病や薬剤との関係まで包括した学修をする。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(① 千原猛/8回) 食品の代謝について生化学的に解釈し、体内動態などについて詳細に解説する。</p> <p>(③ 小菅優子/7回) 食品成分の生体への作用や薬剤との相互作用について、その作用機序を推測する考察法などを教授する。</p>	オムニバス方式	
	医療英語	<p>臨床検査は、生化学、免疫学、解剖学、病理学、生理学、微生物学など数多くの医学の基礎の上に成り立っている。これらの知識の基となる研究報告は国際誌に掲載された論文である。医療英語演習では、医学、医療の分野を問わず、英文論文から読解する能力を身に着けるため、各分野の論文を輪読する。</p> <p>(15 ダニエル・カーク/15回)</p>		
専門科目	病因解析分野	産業衛生学特論	<p>産業衛生の現場で発生している問題点を挙げつつ、健康障害の発生事例、具体的な対策などを示し、主に臨床検査でも用いられる測定機器、技術により、働く人々の健康問題の解決するという産業衛生の目的、方法、考え方を学修する。</p> <p>(1 柴田英治/15回)</p>	
		産業衛生学演習	<p>産業衛生技術、作業環境測定など、臨床検査でも用いられる測定や評価を伴う方法を用いた学術論文を読み、当該研究で使用された機器、技術、考え方などについて解説しつつ、意見交換、討論を行い、産業衛生及びその研究について理解を深める。</p> <p>(1 柴田英治/24回)</p>	
		病原因子検査学特論 I	<p>病原因子検査学 I では、プロバイオティクス摂取による腸内細菌叢の保健効果について研究することにある。プロバイオティクスとは適正な量を摂取したときに有用な効果をもたらす生きた微生物であり、食品から摂取されて腸管内での作用が確認されるものである。近年、健康は腸からなされと考えられ、腸内細菌による腸脳相関 (microbiota gut-brain connection) がクローズアップされ、腸の注目度は高くなってきているプロバイオティクスの研究も含めた学修をする。</p> <p>(3 井上 孝/15回)</p>	
		病原因子検査学特論 II	<p>病原因子検査学 II では、エルシニア菌の産生する耐熱性下痢原因毒素 (エンテロトキシン) についての研究をする。エルシニア菌は培養条件によって形状の違いや毒素産生の有無が知られる。これらの性状の違いを遺伝子レベルで調べ、生物学的特性を研究し、得られた基礎知識から食中毒などに対する予防対策についても学修する。</p> <p>(3 井上 孝/15回)</p>	
		病原因子検査学演習 I	<p>病原因子検査学 I の目的は、プロバイオティクス摂取による腸内細菌叢の保健効果についての研究である。様々なプロバイオティクスやプレバイオティクスについて検討し、どのような効果が期待できるのか、また、市場のものが真のプロバイオティクスといえるのかなど、生活に即したプロバイオティクスの作用機序と保健効果の評価について学修する。</p> <p>(3 井上 孝/24回)</p>	
		病原因子検査学演習 II	<p>臨床検査で得られる各種細菌の産生するエンテロトキシンについて検討し、食中毒や健康被害を調査し、臨床および社会に還元できる情報を作成する。また、食中毒について感染型食中毒と毒素型食中毒に分け、毒素の構造を遺伝子レベルで説明できるだけの知識を修得する。</p> <p>(3 井上 孝/24回)</p>	

専門科目 病因解析学分野	生体防御検査学特論	生体防御検査学では、免疫系に関する理解と知識を深める。とりわけ、免疫応答に主要な抗原特異的な獲得免疫応答やシグナル伝達機構について、その分子制御機構や、感染防御、癌の抑制などへの関与について学修する。また各種ワクチン開発、がん免疫療法など医療への応用についても学修する。 (7 星野真里/15回)	
	生体防御検査学演習	現在の免疫系検査学では、免疫応答に主要な抗原特異的な獲得免疫応答、さらにはその分子制御機構や、感染防御、癌の抑制などへの関与は必須である。術後や感染症において生じるサイトカインストームなど免疫系の暴走の制御法の分子制御、自己免疫疾患の病因の分子レベルでの検討など分子レベルでの免疫学を理解し、免疫学的医療戦略についても考察、学修する。 (7 星野真里/24回)	
	生物化学検査学特論 I	生物化学検査学特論 I では、新たな医療科学技術に関連した研究をおこなう。具体的には、疾患の早期発見に向けた新規臨床検査法や感染症の迅速な診断法の開発として、質量分析を用いた疾患バイオマーカー探索、疾患プロテオミクス解析および抗体精製法の開発をおこなう。これらをおこなうための基本的な生体機能の知識と理解は必須である。そのためには生物化学のみならず、生理学、形態学、疫学、情報科学的手法の理解までが必要である。本稿ではこれらの考え方や手法を学修する。 (オムニバス方式/15回) (2 高崎昭彦/8回) 循環器疾患に関連する生物化学的検査の技術理論 (9 杉浦論/7回) 呼吸器疾患に関連する生物化学的検査の技術理論	オムニバス方式
	生物化学検査学特論 II	生物化学検査学特論 II では、特に悪性腫瘍に焦点を絞り、関連する生物化学的検査に技術理論の基礎を修得させ、新しい解析技術に向けた発展的な思考を養う。生物化学検査の中で特にバイオマーカーの重要性を学修し、発がん物質の探索法についても理解を深める。また、食物に含まれる様々な化学物質による発がん、あるいはがん予防について学び、さらに動物実験に変わる様々な検査手法についても学修する。 (オムニバス方式/15回) (2 高崎昭彦/8回) 悪性腫瘍に関連する生物化学的検査の技術理論 (9 杉浦論/7回) 発がん物質に関連する生物化学的検査の技術理論	オムニバス方式
	生物化学検査学演習 I	生物化学検査学演習 I では、疾患の早期発見に向けた新規臨床検査法の開発法として、質量分析を用いた疾患バイオマーカーの探索や網羅的な疾患プロテオミクス解析および新規抗体精製法の開発について検討する。また、これらの基礎となる生体機能の知識と理解は必須である。疾患早期発見に向けた種々の生物化学的検査を基に新たな検査手法の確立を目指し検討を行う。海外の原著論文なども輪読し、現状を把握し発展的な研究に結びつけるための基盤を学修する。 (オムニバス方式/24回) (2 高崎昭彦/12回) 血清生化学検査法の問題点と発展性 (9 杉浦論/12回) 呼吸器疾患の生物化学的検査法の問題点と発展性	オムニバス方式

<p>生物化学検査学演習Ⅱ</p>	<p>生物化学検査学演習Ⅱでは、疾患早期発見に向けた種々の生物化学的検査を基に新たな検査手法の確立を目指し検討を行う。海外の原著論文なども輪読し、現状を把握し発展的な研究に結びつけるための基盤を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(2 高崎昭彦/12回) 新規バイオマーカー検出に向けたプロテオミクス解析手法を組み立てることを目標に学修する。</p> <p>(9 杉浦諭/12回) 食品に含まれる発がんやがん予防に関与する化学物質の検索法について、従来より行われてきた動物実験の実際と、現在行われている検索手法について考察を進め、さらに先進的で効率的な検索方法について模索しながら学修する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>遺伝子検査学特論Ⅰ</p>	<p>現在の医療では、次世代シーケンサーを用い、患者のゲノム情報や疾患関連遺伝子の網羅的解析をおこなう臨床シーケンスが開始されており、診断や治療方針を選択する場合の補助となっている。本講では、ゲノム解析法、最近注目されているバイオインフォマティクス(生命情報を複数の学問分野のアルゴリズムで解析する学問)など医療情報をもたらす遺伝子検査について解説する。また、先天染色体異常症などの解析方法などについても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(① 千原猛/8回) エビジェネティクスの基礎から遺伝子検査法と結果の解釈など。</p> <p>(12 大島茂/7回) 遺伝子検査学解析への各種アプローチ</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>遺伝子検査学特論Ⅱ</p>	<p>遺伝子検査学特論Ⅱでは、天然物質の発がん予防効果に着目し、がん遺伝子への作用機序について解説する。腫瘍マーカーをはじめ、がんゲノム医療や遺伝子関連検査法のほか、治療につながるがん遺伝子パネル検査についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(① 千原猛/8回) 天然物質の発がん予防効果、癌腫瘍マーカーの検査法について、ほか。</p> <p>(12 大島茂/7回) 各種疾患遺伝子の検査解析アプローチ</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>遺伝子検査学演習Ⅰ</p>	<p>実際に使用されている次世代シーケンサー、DNAシーケンサー、PCR法、taqman法、サイバークリーン法、ランプ法などを用いてゲノム解析法を学び、ゲノム編集などのゲノム解析やバイオインフォマティクスの知識を得る。具体的にはゲノム情報を複数のアルゴリズムを用いて解析するなど、臨床シーケンスの一端を文献検索より修得する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(① 千原猛/12回) 遺伝子関連検査法に関する文献の読解と討論。</p> <p>(12 大島茂/12回) 各種疾患における遺伝子関連検査法に関する文献の読解と討論。</p>	<p>オムニバス方式</p>

専門科目 病態機能検査学分野	病因解析学分野	遺伝子検査学演習Ⅱ 実際のがん遺伝子例のシーケンスを解析し、その例のがんに特徴的な異常を見出す演習、さらに、複数の遺伝子を一度に調べるがん遺伝子パネル検査についても演習を行う。また、コンパニオン検査、がん遺伝子プロファイリング検査などについても文献検索より学修する。 (オムニバス方式/24回) (① 千原猛/12回) がん遺伝子シーケンス解析、がん遺伝子パネル検査に関する文献の読解と討論。 (12 大島茂/12回) 各種疾患における遺伝子検査学に関する文献読解。	オムニバス方式
	生体機能検査学特論Ⅰ 生体機能検査学特論Ⅰでは、生体の電気現象について解説する。中でも微小電位であり在宅医療における意義の高い神経電位や腸電位の体表からの測定法の開発などについて学修する。また、ポータブル超音波断層装置の有用性や現在の装置の性能や、在宅用に新規開発する場合の性能上の特性などについても解説する。特に在宅医療における必要性の高い排便・排尿予測の電氣的現象を捉えるため、体表からの測定法の新規開発論について講義する。また、についても学修する。 (オムニバス方式/15回) (4 伊藤康宏/7回) 生体電位の測定理論。電氣的特性と電子工学的特性。 (④ 榎本喜彦/8回) 具体的な生体電気現象の測定理論。	オムニバス方式	
	生体機能検査学特論Ⅱ 生体機能検査学Ⅱでは、生体の外界への適応や、外界から入力される情報に対する生理機能の変化について研究する。生体は、外力に抗するとき歪を生じる。この抗する力を応力(ストレス)といい、中枢及び末梢神経系と細胞間ネットワークが応答する。本講では視覚・聴覚などの特殊感覚と、体位などの体性感覚に焦点をあて、応力への生体反応を学修する。 (オムニバス方式/15回) (4 伊藤康宏/7回) ストレス学説、ストレス応答総論。 (④ 榎本喜彦/8回) ストレス応答系各論。	オムニバス方式	
	生体機能検査学演習Ⅰ 生体機能検査学演習Ⅰでは、電位を用いた、中枢神経系の細胞活動および機能的活動の体外からの検査法について、最近の動向を論文から読み解く。また、非侵襲測定法の確立していない腸電位に関する知見や測定法に関して、実際に測定を試みることで問題点を洗い出す。これ以外にも電気生理学的手法による多くの検査法を学修する。 (オムニバス方式/24回) (4 伊藤康宏/12回) 生体電位の測定方法と在宅医療。 (④ 榎本喜彦/12回) 生体電位の測定装置開発の検討と問題点の洗い出し。	オムニバス方式	

<p>生体機能検査学演習Ⅱ</p>	<p>生体機能検査学演習Ⅱでは、視覚・聴覚などの特殊感覚と、体位などの体性感覚に焦点をあて、ストレスへの生体反応を探る。高齢者では思考力や運動能力の低下によりストレス感が高い人が多いと言われている一方で、在宅医療の従事者にもストレス感が高い人が多いことが知られている。本講では、在宅医療にかかわる人たちのストレスによる感覚の変化や、ストレスを軽減する方法について文献読解を含めた検討を行いながら学修を進める。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(④ 榎本喜彦/12回) 感覚のストレス応答による変化についての論文読解。</p> <p>(4 伊藤康宏/12回) 高齢者、医療従事者のストレス感およびストレス緩和法についての論文読解</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病態解析検査学特論Ⅰ</p>	<p>神経変性疾患は年齢とともに発症率が増加し、高齢化が進む現在においては、わが国ならず世界的にも患者数が増加しており、その対応が社会問題となっている。病態解析検査学特論Ⅰでは、生活習慣病の可能性のある神経変性疾患のうちのアルツハイマー型認知症について、その概要から基礎病態について解説し、これら疾患に対して現在我が国が抱える現状について考える。同時に中枢神経系の末梢器官とりわけ消化管に及ぼす障害について、機能性食品および脳腸軸の標的である腸を中心に問題点を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(5 森啓至/8回) 高次脳機能および中枢神経病変とアルツハイマー病とその早期発見の方法について解説する。</p> <p>(③ 小菅優子 /7回) 機能性食品の作用と脳腸軸に由来する機能性消化管病変について測定法を含めて解説する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病態解析検査学特論Ⅱ</p>	<p>生活習慣が引き金となって発症する可能性もある認知症の病変の一つとして認識されている嗅覚異常について解説する。ヒト嗅覚系の基礎及び、これら疾患での臨床検査領域の視点から見た現状と問題点、そして解決策について討論していく。また、生活習慣病の予防に役立つ発酵食品について、大豆発酵食品の高血圧防止効果、生活習慣病や長寿に関する因子などについて学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(5 森啓至/7回) アルツハイマー型認知症とそれに伴う嗅覚異常とその検査法、治療法と問題点について解説する。</p> <p>(③ 小菅優子/8回) 発酵食品の生活習慣病への効果と長寿の関係などについて解説する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病態解析検査学演習Ⅰ</p>	<p>病態解析検査学演習Ⅰでは、神経変性疾患に対して行われている検査について、現状を把握しその意義と問題点を文献調査などから詳細に検証する。また、生活習慣病に効果があると考えられている各種の健康食品の体調節機能や長寿に関する因子、薬剤との相互作用などについて学び、健康食品管理における臨床検査技師の役割と在宅医療への応用についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(5 森啓至/12回) 神経変性疾患の早期発見に関する臨床検査の課題を発掘し、検討する。</p> <p>(③ 小菅優子/12回) 各種健康食品の機能、薬剤との相互作用と臨床検査技師の果たす役割について検討する。</p>	<p>オムニバス方式</p>

病態機能検査学分野
専門科目

<p>病態解析検査学演習Ⅱ</p>	<p>病態解析検査学演習Ⅱでは、発酵食品を中心としたわが国の発酵食品の中 枢神経系に及ぼす機能について解説する。大豆発酵食品は、体調を調整す るいろいろな機能を持つ。演習では、神経変性疾患における嗅覚異常とそ れに対する嗅覚検査実施の現状と問題点について文献調査を中心に検討し つつ学修を進める。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(③ 小菅優子/12回) 発酵食品と生活習慣病、ホメオスタシス、長寿因子について検討する。</p> <p>(5 森啓至/12回) 嗅覚検査とアルツハイマー型認知症早期診断の可能性について文献紹介を 通して検討を進める。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病理病態検査学特論Ⅰ</p>	<p>病理病態検査学特論Ⅰでは、医学、医療の基礎知識をふまえた疾病への応 用を紹介する。病理組織学的方法だけでなく、分子病理学的診断法、細胞 内シグナル伝達系などから病因を解析し、その後の応用研究に役立つよう に理論の構築法を学修する。また、臨床で利用される病理学的解析法から 最先端の研究で行われる解析法を含み、幅広い形態学的解析法について学 修するとともに、関連する情報を得ることを学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(② 山口央輝/8回) プロテオーム解析を中心に病態解析法を講義する。</p> <p>(11 澤田浩秀/7回) 病理組織学的方法による病態解析法を講義する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病理病態検査学特論Ⅱ</p>	<p>病理病態検査学特論Ⅱでは、認知症の概要と発症機構、認知症の臨床検査 からその予防法について教授する。神経変性疾患全般およびその代表疾患 としてパーキンソン病について発症機構、最新治療法について学ぶ。さら に、高齢化に伴い認知症患者が増え続ける現状において、認知症患者との 接し方、認知症の今後の対策、予防について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(② 山口央輝/5回) 認知症の概要、現状と政策について講義する。</p> <p>(11 澤田浩秀/1回) 認知症の予防と検査法などについて講義する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>病理病態検査学演習Ⅰ</p>	<p>病理組織細胞学検査は、病態組織の構造、機能を調べることを目的とした 検査である。病理病態検査学演習Ⅰでは、病理組織標本の作製から免疫組 織化学、画像解析、DNAハイブリダイゼーション、蛍光in situハイブリ ダイゼーションなど様々な技術などを駆使し、研究として必要な形態学的手 法を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(② 山口央輝/12回) プロテオーム解析を中心に病態解析法の演習などを行う。</p> <p>(11 澤田浩秀 /12回) 病理組織学的方法による病態解析法の演習などを行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>

専門科目 病態機能検査学分野	病理病態検査学演習Ⅱ	<p>病理病態検査学演習Ⅱでは、パーキンソン病モデルマウスの運動解析から、その組織を用いた病理学的解析、生化学的および免疫学的解析について実施する。また、認知症患者に対して実践する心理検査を経験するとともに、実際に認知症カフェなどに参加し、認知症患者と関わることによってコミュニケーションを体験する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(② 山口央輝/6回) 認知症の臨床と心理学的検査法について演習する。</p> <p>(11 澤田浩秀/18回) パーキンソン病マウス組織標本を用いた各種の解析方法について演習する。</p>	オムニバス方式
	在宅医療研究特論	<p>在宅医療研究特論では、在宅医療に関与するための臨床検査技師の取り組みについて、POCT(Point of Care Testing)検査機器の開発研究、サルコペニアへの検査学的助言、血管疾患検査による前向きコホート研究などの他、出張検査のためのポータブル検査機器の開発などについて講義する。また、在宅医療を受ける患者の年齢構成や病態などの背景など臨床検査技師として学ぶべき重要な話題も学修する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(⑤ 藤田孝 /3回) 在宅医療における臨床検査技師の役割を特に必要性の部分を中心に解説する。また在宅医療現場で用いられるPOCT装置の現状と問題点を特に精度管理の部分を中心に講義する。</p> <p>(⑥ 森本誠 /3回) 簡易検査キットで広く用いられているイムノクロマト法の現状と問題点、バイオマーカー探索への応用を講義し、新たな測定技術の展望についても広く解説する。</p> <p>(⑦ 福田愛子 /2回) 在宅医療の現場で得られる検査データの取り扱いについての現状と問題点を講義し、IT技術を用いた検査データの活用について展望、健康支援システムの構築など広く解説する。</p> <p>(14 鈴木真紀子/7回) 在宅医療での血管に関連する疾患の検出法、病態について講義する。</p>	オムニバス方式
	在宅医療研究演習	<p>在宅医療研究特論では、在宅医療に関与するための臨床検査技師の取り組みについて、在宅医療を行う施設から得られた情報を基に具体的に検討を行う。また、先進諸外国での在宅医療による成果や問題点について文献検索により情報を収集する。これらの情報からPOCT機器の開発構想や研究方針を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/24回)</p> <p>(⑦ 福田愛子 /2回) 在宅医療に関する他職種含め現状、将来展望など広く把握するための文献抄読を行い、知見についての解説を行い、演習形式で検討を行う。</p> <p>(⑥ 森本誠 /4回) 医療現場で広く用いられるイムノクロマト法を使った簡易検査キットの現状、将来性を文献抄読により学修させ、さらには簡易検査キットに応用できる新たな原理、手法開発に向けた実験系を演習形式で検討を行う。</p> <p>(⑤ 藤田孝 /6回) 在宅医療で広く用いられるPOCT装置、特にSMBG装置について文献抄読を行い、それらの知見を基に新規POCT装置、SMBG装置開発に向けた実験系を組み立てることを演習形式で行う。</p> <p>(14 鈴木真紀子/12回) 在宅医療での血管に関連する疾患の検出法について演習を行う。</p>	オムニバス方式

特別研究	特別研究 I	<p>研究者として必要な基礎的能力を専門教員の指導の下で構築する。基礎的能力とは、研究の企画立案、実験方法の確立、データ解析、考察、プレゼンテーション力である。これは発展的に国内のみならず広く国際的視野を持ち、グローバルな情報を積極的に取り入れて高度な臨床検査技術者、教育者、研究者となる礎を築くものである。特別研究 I では、各領域における専任教員が、それぞれの研究分野における専門性の高い研究や臨床上の課題などをテーマとし、研究の基礎的能力の構築に係る学修を行う。</p> <p>(1) 柴田英治 産業衛生学では、職場における有害物質曝露の評価法としていくつか確立している方法について、実際の生体試料を用いた解析を行い、正確な評価ができることを確認することを目標に、基礎的な訓練を行う。</p> <p>(2) 高崎昭彦 疾患バイオマーカーの探索」をテーマに最新の文献検索、二次元電気泳動、質量分析などのプロテオミクス解析に関する情報を収集し、実験方法の確立を目指す。</p> <p>(3) 井上 孝 プロバイオティクスの定義および作用機序に関する世界中の最先端な情報を収集するため、プロバイオティクスに関する最新の論文を中心に検索および輪読する。</p> <p>(4) 伊藤康宏 生体機能検査学では、消化管の微弱な活動電位を捉えることで消化管の自律機能を検出する方法を開発することを目的とする。特別研究 I では、基礎となる生体電気現象についての検討を行う。</p> <p>(5) 森啓至 臨床検査学を学ぶ上で、正常な人体の構造と機能を追求することは、各種疾患の成因、病態、治療、予後に関わる病態生理の理解につながる重要な学問である。国内外の研究論文を検索しながら、修士論文作成のために必要となる基礎的知識から最先端の生命科学について学修する。</p> <p>(①) 千原猛 ゲノム解析法を学ぶ基礎として、シーケンサー、PCR法、ランプ法などの原理、方法を解説し、診断や治療方針選択の一助となっているクリニカルシーケンスについて理解を深める。</p> <p>(7) 星野真理 生体防御検査学として生体防御に関するテーマの研究の基礎的能力向上のために研究の企画立案、実験方法の習得、データ解析、考察を行う。</p> <p>(②) 山口央輝 組織的プロテオーム解析の手法を用いて癌の解析を行うため、情報を収集し、実験方法を確率する。</p> <p>(9) 杉浦諭 発がんに関与する化学物質の検索手法について、国内外の論文から最新研究を検索し、より効率的で先進的な方法に関する研究の企画立案を目指す。</p> <p>(③) 小菅優子 機能性食品や発酵食品の定義及び身体に及ぼす作用機序に関するテーマについて最新の文献を検索し、データの解析、考察を行う。</p> <p>(11) 澤田浩秀 免疫組織化学、画像解析などを含む幅広い形態学的解析法を利用するとともに、新たな解析手法の情報を収集し、研究を行うのに必要な形態学的解析法を身につける。</p> <p>(12) 大島茂 遺伝子検査学を学ぶ基礎として、DNAシーケンサー、PCR法、リアルタイムPCRなどの原理、方法を解説し、検査、診断や治療方針の基本となる遺伝子解析について理解を深める。</p> <p>(④) 榎本喜彦 初感染後、潜伏感染しているウイルスが、再活性化する要因をテーマとし、文献検索から研究の企画立案、実験方法の習得を行う。</p>	
------	--------	---	--

<p>特別研究Ⅱ</p>	<p>研究者として必要な基礎的能力を専門教員の指導の下で構築する。特別研究Ⅱでは、各領域における専任教員が、それぞれの研究分野における課題や在宅医療、臨床上の課題、新規臨床検査機器の検討などの専門性の高い研究をテーマとし、既に得られているデータの上に積み上げる研究方法の再検討など研究能力の向上に係る学修や修士論文の作成のための成果の集積を進める。</p> <p>(1 柴田英治) 産業衛生学では、職場における有害物質曝露評価の新しい方法の開発に向けて、労働者からの検体採取など研究遂行上の倫理的留意点を整理し、調査・実験を開始するための研究倫理の承認を受ける。条件が整えば研究に着手する。研究遂行上の問題がなければ基本的なデータをを得る。</p> <p>(2 高崎昭彦) 疾患プロテオミクス解析について、実験系を組み立て、修士論文のテーマを確立し、基礎実験、基礎的検討を行っていく。</p> <p>(3 井上孝) プロバイオティクスの保健効果について最新の情報収集および保健効果における評価方法に関する新たな方法を開発する。</p> <p>(4 伊藤康宏) 生体機能検査学では、消化管の自律機能の検出法を開発するために、医学系のみならず、工学系を含めた文献検索による調査を行うとともに、実験を開始する。</p> <p>(5 森啓至) 神経変性疾患の早期発見のための新たな検査方法の開発につながる基礎的研究の実施をテーマとし、国内外の研究論文を検索しながら研究の進め方から文献の活用方法、研究結果の評価方法などについて学修し修士論文の作成を目指す。</p> <p>(① 千原猛) 核酸抽出法からゲノム解析法までの技術を習得するとともに、天然物質の発がん予防効果に着目し、動物実験においてそれらの修飾作用を習得した方法にて検討する。</p> <p>(7 星野真理) 生体防御検査学として新規臨床検査技術の検討開発など生体防御に関するテーマの応用研究の企画立案、実験方法の習得、データ解析、考察を行い、応用研究能力の向上を図る。</p> <p>(② 山口央輝) 組織的プロテオーム解析の手法を用いて癌の解析を行うため、収集した情報を基に実験系を組み立て、測定を開始する。</p> <p>(9 杉浦諭) 特別研究Ⅰで企画立案した化学発がんに関する研究について、基礎データとなるエビデンスの収集を行い、それを基に新たな検索手法の確立を図る。</p> <p>(③ 小菅優子) 機能性食品や発酵食品による生活習慣病改善の効果についての研究の企画立案、実験方法の習得、データ解析、考察を行い、応用研究能力の向上を図る。</p> <p>(11 澤田浩秀) 認知症疾患の発症機構、臨床検査、予防法、またはパーキンソン病の基礎医学的研究などに関する国内外の多くの情報を収集し、修士論文作成に必要な実験系を組み立て施行する。</p> <p>(④ 榎本喜彦) 初感染後、潜伏感染しているウイルスが、再活性化する要因をテーマとし、いくつかのストレスを用い、唾液を資料に用いて生体内の変化を検討する。</p>	
--------------	--	--

特別研究	特別研究Ⅲ	<p>研究者として必要な基礎的能力、医療への応用力を専門教員の指導の下で構築する。特別研究Ⅲでは、各領域における専任教員が、それぞれの研究分野における専門性の高い研究指導を行なう。データの蓄積により、特別研究Ⅱまでの結果の解釈とは異なることがあるが、研究倫理に則った対処が要求される。これら、研究の基礎的能力の構築の上に集積した研究成果をまとめ、修士課程の学修者としてふさわしい修士論文を完成させる。</p> <p>(1 柴田英治) 産業衛生学では、得られたデータの解析と職場における有害物質曝露評価に関する先行研究の検討を行い、修士論文の結果と考察の項の執筆を行う一方、すでに特別研究Ⅱで取り組んだ論文の緒言、方法などの項を推敲し、修士論文を完成させる。</p> <p>(2 高崎昭彦) 修士論文テーマに基づいた最新知見を網羅的に収集し、自らの研究に活かして遂行する。得られた知見を修士論文としてまとめ上げていくことを目的とする。</p> <p>(3 井上孝) プロバイオティクスの生活習慣病予防に有効な指標の評価方法に関する論文作成をする。</p> <p>(4 伊藤康宏) 生体機能検査学では、消化管の自動能検出法の開発にあたり、予備実験の結果を踏まえ、多数の被検者から得られた電気的データの適切な解析法を定め、技術的な問題に取り組む。これらの課程と結果を熟考して修士論文を完成させる。</p> <p>(5 森啓至) 特別研究ⅠおよびⅡで学んだことを基礎とし、アルツハイマー型認知症などの神経変性疾患に関しての基礎研究、早期診断に有用となる検査方法につながる基礎的研究を行い、修士論文の完成を目指す。</p> <p>(① 千原猛) 特別研究Ⅱで得られた結果を基に、それらの天然物質の安全性の確認とともに特に食による発がん予防を目指し、その有用性を啓発する論文を完成させる。</p> <p>(7 星野真理) 生体防御検査学として研究を行った内容を次の研究に繋ぐために将来に向けての問題点などを洗い出し、修士論文にまとめる。</p> <p>(② 山口央輝) 組織的プロテオーム解析の手法を用いて癌の解析を行い、実験データを蓄積し、得られた知見を修士論文として完成させる。</p> <p>(9 杉浦諭) 特別研究ⅠおよびⅡで得られた知見を基に、それらを体系的にまとめて、発がんに関与する化学物質の新規検索法に関する研究として修士論文にまとめる。</p> <p>(③ 小菅優子) いわゆる健康食品と位置付けられている食品に関しての研究内容を次の研究に繋ぐために将来に向けての問題点などを洗い出し、修士論文にまとめる。</p> <p>(11 澤田浩秀) 特別研究Ⅱで得られたデータを解析し、十分な検証を行うとともに、国内外の多くの情報を基に十分な考察を加え、修士論文を完成させる。</p> <p>(④ 榎本喜彦) テーマについて実験測定を行い、得られたデータを適切に解析し、その結果を熟考して修士論文を完成させる。</p>	
------	-------	--	--